

全ての願いがかなえられる幸い

【聖書】詩編 103 編 1～5 節 【ダビデの詩。】

わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこそって 聖なる御名をたたえよ。わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない。主はお前の罪をことごとく赦し 病をすべて癒し 命を墓から贖い出してくださる。 慈しみと憐れみの冠を授け長らえる限り良いものに満ち足らせ 鷲のような若さを新たにしてくださる。

[序] コーランを燃やせ

2001年の9月11日、アメリカで同時多発テロが起り、死者2973名の大惨事となりました。イスラム過激派の犯行とされ、アメリカはアルカイダの本拠地アフガニスタンの武力制圧を開始しました。しかしアフガン紛争は未だに決着がつかずアメリカの大きな負担となっています。その過程でアメリカはイラクをも攻撃し、独裁者フセイン大統領を殺害しましたが、思うように治安が回復しないままに、この8月で戦争終結し、軍隊の引き上げを開始しました。このように強力な軍事力をもってしても、世界各地でテロ活動を行う過激派を取り除くことができないのです。世界はどう対応していけばよいのでしょうか。

この時に、フロリダの小さな教会の牧師がイスラム教の聖典であるコーランを燃やすと宣言してイスラム教徒の反撥をかい、世界各地でイスラム教徒の抗議行動が起り、大きな社会問題になりました。アフガンでは大規模な抗議デモが軍事基地に押し寄せて、負傷者が出ました。その牧師は「イスラム教は悪魔の教えだ」と公言し、インターネットでコーランを持ち寄るよう呼びかけたところ、約200冊集まったと新聞に報じられていました。この牧師の宗教観をどのように考えたらよいのでしょうか。

[1] 諸国の民の栄光と誉れ

私は先週の詩編 100 編の説教で、「全地よ」という呼びかけに注目しました。これは神さまが創造された空・海・野・山の全地に満ちている全ての生きとし生けるものを指すと申し上げました。神さまはこれらの全てを非常に良いものとしてお造りになり、祝福して人間の手に委ねられたという信仰をもって、聖書は書き始められたのです。神さまはすべての生き物の食べ物に青草とお決めになりました。ですから今日のように人間がいろいろな生き物の命を奪って食べ物にするなどという弱肉強食はなかったのです。

それはノアの洪水の後で、神さまが人間の罪深さに譲歩して、やむなく認められたことでした。言葉の違いも同じです。最初は皆が同じ言葉で通じていたのです。しかし人間の罪深さの故に、神さまは人々の言葉を乱して、全地に散らしてしまわれたことでした。こうして世界各地に散った人々によって、それぞれの文化が生まれ、宗教も生まれました。文化もその文化が生み出した宗教も、私たち人間の罪深さと結び付き、その罪深さを克服することを、課題として持っているのです。

聖書はヨハネ黙示録で終わります。私たち人間の知恵や力では平和を取り戻すことができない世界に、神さまが新しい天と新しい地をもたらしてくださる、「主よ、来てください」という信仰で聖書は閉じられています。すべてのものを非常に良いものとして創造された神さまが、もう一度完全な世界を備えて、すべてのものを招いて下さるという信仰です。

神さまが用意して招いてくださる神の都の様子が、黙示録 21～22 章に記されています。そこで私が注目するのは「人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る」(黙示録 21:26)という言葉です。日本人は日本の栄光と誉れを携えて来るようにと、神さまは招いておられると述べられているのです。日本には日本ならではの独特の美しい文化があります。神さまはそれを日本人の栄光と誉れとして携えて来るように、招いていてくださっていると、私は理解します。

シンガポールの友人たちは、日本観光から帰ってくると、日本の古い神社・仏閣の美しさを賞賛します。周囲の美しい自然を取り入れたただずまい、そこに受け継がれてきた優れた芸術品の数々、伝統的な祭り・行事、職人の技能等、これらはまさに世界に誇れる日本の栄光と誉れの一つではないでしょうか。ではこのような美しい伝統文化を生み出した神道・仏教に日本はお任せして、キリスト教は遠慮すべきなのではないでしょうか。日本では 286 年間キリシタン禁止でした。私たちは何故この日本でも、キリストの福音を全ての人に宣べ伝えようとしているのでしょうか。

[2] 神の都を破壊する汚れた者

今日は午後にシンガポール会をしますので、シンガポール国際日本語教会と一緒に礼拝を守っていた方々が、この礼拝にも出席しておられます。Sさんは大学4年生。お父さんの転勤で小学校4年生から6年生までをシンガポールで過ごしました。折角の外国生活だからと5年生から2年間、国際校の小学部に転校して英語で教育を受けました。授業についていくのに、それはそれは大変な努力をしました。

さて日本に帰国して中学に入りました。ところが得意な英語の時間にいじめを受けました。発音もスピーチも理解力も抜群だからでした。なんと情けない話でしょうか。私たちは他人の優れていることを、素直に喜び合えないのです。

ルカ福音書の 22 章の最後の晩餐の記事をお読みください。12 人の弟子たちはその食事の後でさえ、「自分たちの中で誰が一番偉いだろうか」と言って議論をし始めた、と記されています。主の十字架の死の直前でさえも、何と情けない弟子たちだったことでしょうか。

皆さん、天国は世界中の人々がそれぞれの国民の栄光と誉れを携えて集まって来る都です。人よりも自分が優っていなければ満足できない心では、他の民族の栄光と誉れを喜び合えません。けちをつけ、けなし合い、争い合うならば、たちどころに天国が天国ではなくなってしまいます。

ですから黙示録には神の都に入れる条件が、はっきりと書き記されているのです。「しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行なう者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名を書いてある者だけが入れる」(21:27)

そうです。私たちは皆、喜ぶ者と共に喜べない罪、愛し合えない罪で汚れています。その罪を清めて下さるために、イエス・キリストが十字架にかかって死んで下さったのでした。「この方こそ、わたしたちの罪、いや、わたしたちの罪ばかりでなく、全世界の罪を償ういけにえです」(Iヨハネ2:2)

神の都に集う民は皆、罪から清められていなければなりません。ですからイエスさまは、復活されると直ぐに弟子たちにお命じになりました。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」(マルコ 16:15)。私は信じます。このイエス・キリストが、神の都の入り口に待ちかまえていて、未だに罪に汚れた衣をまとって集う人には、ご自分の血の清めを受けてから入るようにと、呼びかけて下さるに違いありません。

全てのものを非常に良いものとして創造して祝福して下さった神さまが、この世の終わりに、歴史のなかで生まれたそれぞれの民族の文化を、栄光と誉れとして携えて来るようにと招いて下さっているのです。「イスラム教は悪魔の教えだ」といってイスラム教徒の栄光と誉れを傷つけるキリスト教徒こそ、神さまが備えて下さった神の都に騒乱を惹き起す「汚れた者、忌まわしいことと偽りを行なう者」ではないでしょうか。悔い改めて十字架の清めにあずからなければなりません。

[3] 主の御計らいとは

今日は詩編 103 編を学びます。私はここで2節の「主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない」に注目します。新共同訳が「主の御計らい」と訳した所を、口語訳は「主の良くして下さったこと」新改訳は「そのすべての恵み」と訳しています。

3節以下に、罪をことごとく赦し、病をすべて癒し、命を墓から贖い出してくださり、即ち死から命を取り戻してくださると歌われています。私のように老年になりますと、「驚のような若さを新たにしてくださる」という言葉が強く響いてきます。なるほどこのように、一生良いもので満ち足らせてくださる神さまの恵みを忘れては、罰が当たります。全身全霊をあげて神さまをたたえなければなりません。

でも皆さん、私たちは毎日お祈りして来ましたが、その祈りがことごとくお願いした通りにはかなえられたでしょうか。健康をお祈りしました。しかし度々病気にかかって苦しみました。「命を墓から贖い出してくださる」とありますが、大切な人が幾人も召されました。そして戻していただけませんでした。神さまは私たちの祈りを、その通りには聞いて下さらないことの方が多かったのではないのでしょうか。それでも「わたしの魂よ、主をたたえよ。わたしの内にあるものはこぞって、聖なる御名をたたえよ。」とこの詩編は呼びかけています。どうしてでしょうか。

今日の週報の表紙の巻頭言をご覧ください。一人の病弱な生涯を送った人の書き残した詩を記し

ました。お読みしてみます。

大事をなそうとして 力を与えて欲しいと神に求めたのに
つつしみ深く 従順であるようにと 弱さを授かった

より偉大なことができるように 健康を求めたのに
より良きことができるようにと 病弱を与えられた

幸せになろうとして 富を求めたのに
賢明であるようにと 貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして 権力を求めたのに
神の前にひざまづくようにと 弱さを授かった

人生を楽しもうと あらゆるものを求めたのに
あらゆることを楽しめるように 生命を授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞きとどけられた

背ける身にもかかわらず
言い表せなかった祈りもすべて かなえられた

私はあらゆる人の中で
もっとも豊かに祝福されたのだ

この人は、力を求めたのに弱さを、健康を求めたのに病弱を、富を求めたのに貧困を与えられました。つまり、求めたものは何一つとして与えられなかったのです。しかし、弱さゆえにつつしみ深く生きることができてよかった、病弱のゆえに健康な者よりも良いことが出来た、貧乏ゆえに金持ちよりも賢く生きられた、偉くなれなかったので謙遜になれた。つまり願いはすべて聞きとどけられたのです。だから自分は、あらゆる人の中で最も豊かに祝福されたのだと歌っています。

これを与えられれば幸せになれると考えて祈り求めたけれども、与えられなかったのです。しかし後になってみると、神さまは自分が祈ったよりも、もっと良い恵みを与えて下さったと分かり、感謝できた——こういうことは、私たちにも言えるのではないのでしょうか。「求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞きとどけられた」。何と素晴らしい言葉でしょうか。

詩編 103 の2節で「わたしの魂よ、主をたたえよ。主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない」と

歌われている「主の御計らい」とは、私自身よりも私をよく知って居られる神さまが、私の将来を考えて、この方が良いとお考えになって祈りに答えて下さる。これが「主の御計らい」と言われているのです。ですから私は口語訳の「恵み」新改訳の「主の良くしてくださったこと」よりも「主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない」の新共同訳の方が、意味をよく伝えてくれていると思います。

【結】 十分な恵み

使徒パウロは、生涯持病に苦しんだ人でした。神さまのためにもっとよく働けるようにと、何度もこのとげを取り除いて下さいと祈りました。しかし神さまの答えは「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」(Ⅱコリント 12:9)でした。そこで彼は「大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう」とさえ言っています。

神さまは、私たちすべての者を罪から救おうとして、イエス・キリストを十字架にかけて死なせることまでなされた愛の神さまです。どうしてすべてのものを私たちに下さらないはずがありませんか。パウロが言っています。「万事が益となるように共に働く」のです。目先のきかない自分の狭い心からではなく、祈りの答えの中に、神さまの御計らいを見出して、感謝しほめたたえる信仰を持ちたいものです。